

PART 4

《すぐにハニー社に連絡を取り、一人で訪問する郁》

【榎藤】「昨日はありがとうね。今日は何かな？」

「はい、改めて昨日のお詫びに参りました。榎藤部長、本当に、大変申し訳ありませんでした」

《腰を深く曲げ頭を下げる》

「まあまあ頭を上げてよ。私の方こそ、酔ってしまって君に失礼してしまったね」

「いえ、とんでもございません。それで、あの、お願いがあるのですが……」

「分かってるよ。法務部から待ったがかかった件だね」

「はい、部長のお力添えをぜひお願いいたします！」

「それで急に一人で来たんだね」

「はい。なにとぞよろしくお願いいたします！」

「君の誠意と熱意はよく分かった……だけど、普通は何か、おみやげを用意するんじゃないかな？」

「おみやげ、ですか？」

「ウチの会社にとってのメリットだよ。例えば、新酵母の専属利用権とかがあれば法務を説得しやすいけど」

「それは……すみません」

「まあ何とかするよ。貸しはいつか返してもらおうよ(笑)」

「はい、ありがとうございます！」(良かった……)



《接待から一週間後。社長室》

「おはよう！ ハニー社との提携がほぼ決定したよ」

「やりましたね、社長！」

「私のせいで」苦労をおかけしました」

「いやいや、柏木君が一人で謝罪に行って誠意を見せてくれたからだよ。権藤部長も感心してたよ」

「本当ですか？ ありがとうございます！」

「あれ、もう元気になっちゃって（笑）」



「それで今日、最終的な確認の打合せをした後だけ…」

「はい、夜の懇親会ですね。ハニーホールを借り切って」

「うん、今回の契約に係わったメンバーが集合するから、絶対に失敗はできないよね」

「営業部長も法務部長もいらつしやいますしね」

「私、今度こそ頑張ります！」

「大丈夫かな？ 何かあっても笑ってやり過ぎすのよ。絶対に、先方を批判したり恥を掻かせたりしないこと」

「もちろんです。分かってます」

《その日の夜。K社の別のプロジェクトでトラブル発生。
社長の三浦は急遽懇親会に遅刻すること》

【権藤】「やっぱり社長は間に合わないのかな？」

【営業部長・錦戸】「誠に申し訳ございません！ 社長が
参りますまで、私が代わりを務めさせていただきます」

【ハニー社法務部長・仲野】「やはりベンチャーだね…」

（変な雰囲気になってきちゃった、どうしよう…）



「大丈夫です、私たちが盛り上げますから！」

「どうぞよろしくお願いします！」

「まあ、美人秘書二人にそう言われちゃ仕方ないな……
今日は郁ちゃん、大胆な恰好だね！」

「はい、頑張ってみました！」（恥ずかしいけど……でも、
この接待は絶対に失敗できないのよ！）

《両社総勢50人の懇親会が始まる。郁は権藤と同じ卓》

「どうだい、入社してから2カ月経って？」

「はい、失敗も多いですけど、毎日新鮮で楽しいです」

「彼女はとても頑張り屋で社内でも人気ですよ」

「そりゃあ、こんなに可愛ければね。ミスK大だっけ？」

「はい！」（このスカート、座ると
ずり上がっちゃう…でも、笑顔！）

「上から84・60・86みたいですよ」《どよめく男たち》

「ちょっと、翠さん、やめてください！」

「からかうとおもしろいんですよ。ハニー社の皆さまも可愛がつてあげてくださいね」

「はいい！」「黒ストッキングエロいねw」「太もも撫で撫でしてもいい？」「ごめんなさい、駄目ですっ」

《一同が笑い、一気に打ち解けた雰囲気》

《懇親会開始から30分経過。社長から連絡無し》

「ところで、三浦社長はまだ来れないのかなあ？」

「申し訳ございません！ 少々長引いておりますて…」

「あれ、ペンを落とした、どこかなあ」 《榎藤がしやがみ、
郁に手をのばし、太ももへ》

「きゃ、やめてくださいー！」

《思わず睨む郁》

「あ、ごめんごめん。これってセクハラ？ また突き飛ば

されちゃうかな？w」 「マジですか？」 「怖いなあw」

「い、いえ…先日は大変失礼しました」 (ずるい！)

「これはいんだね…若いから太ももムチムチだねw」

「ここで、新人の挨拶をさせていただけないでしょうか」

「え、今から？」 (名残惜しそうに郁の胸元と腰を見る)

「よろしく願います！」 (これで逃げられる……)

《司会者のアナウンスの後、皆の前に立つ郁》

「皆さま、初めての方もいらっしゃるんですが、K社秘書課の柏木郁と申します。よろしく願いいたします」

《パチパチパチと拍手。次の言葉を待つ雰囲気》

「……あの、今回はこんなに大きなプロジェクトに係わる
ことができて、大変勉強になっています……」
(急に指名されたから何も考えてなかった、どうしよう)

《冷えかけた会場の雰囲気戸惑う郁》

「ハニー社のためなら、なんでもするそうですよー」

《翠の声に、会場がわっと盛り上がる》

「へえ、なんでもするんだ」「やる気があるねえw」

「ほう、いいねえ。宴会芸でもしてくれるのかな？」

「あの、特に芸は無いんですけど……」「あれえー？」

「何かリクエストありますか？ 何でもしますよー！」

「ワカメ酒！」《下種な笑い》「え、ワカメって？……」

「この子ウブなので、最初は優しくお願いしますw」

《翠に目配せをしてから、口を開く榎藤》

「あ、それじゃあ、あのゲームしてもらおうかな」

「はい、どんなゲームでしょうか？」

「ハニーホールの新人さんがするゲームなんだけど、ウエイトレスをして、ミスをしたら服装をチェンジ」

「あーあれ！」 「いいですねえw」

（やだ、またエッチな目で見てる）

「ミスした時の服装は、どう変わるのでしょうか？」

「うちの系列店の制服だから安心して。特製のサイコロで決まるよ。ハニー社のためなら何でもするんだよね？」

「はい……」 （それなら大丈夫そうだけど）

「何か不満かね？」 （逆らえないよね、新人さんじゃw）



「おもしろそうです！　どうなったら終わりですか？」

「いつもは10分で終わりなんだけど……今日は、三浦社長が来るまでつてことで」 《賛成！、と男性たち》

「承知しました。では、秘書の柏木が三浦の遅刻の責任を取りますので、何卒お許しください。いいわよね？」

「はい」 （仕方ないわ）

《ひどい先輩だなと笑い声、会場が拍手で包まれる》

「絶対に笑顔で上手に乗り切るのよ」 《郁の耳元で囁く》

「それでは柏木さん、抱負をどうぞ！」

「はい、柏木郁、ウエイトレスゲーム、頑張ります！」



PART 5

《六面が液晶の電子サイコロが用意され、最初の衣装を決めるために郁が投げる……》

【ゲーム司会役のハニー社員】「はい、出ました……当社系列のアント・チラーズの制服でスタートです！」

「おおおっ」「アンチラいいね！」「見たい！」

「え、どんな制服ですか？」（嫌な予感）



「大丈夫、郁ちゃんのスタイルにぴったりの制服よ」

「そうですか……」（いやらしい視線を感じるけど）

「それでは、更衣室で着替えてきてください」

「楽しみ」「絶対可愛いよ！」

「手伝ってあげようっと」

《3分後。引きつった表情で皆の前に現れた郁》

「あの、すみません、この格好はちよつと…」

（胸をこんなに強調するなんて…スカートも短いし）

「何でいやなの？」

「表情硬いよ」

「うちの制服は恥ず

かしくて着れない？」

「君、本当にハニーグループと仕事をする気あるの？」

「信頼できる会社じゃないと提携はできないなあ」

「すみません、そういうわけではなくて…」



「本当は嬉しいけど照れてるのよねー？」

「照れなくてもいいのに」

「脚もきれいだし」

「胸もあつ

ていい感じだよ」

（ほら、フォローしてあげたんだから）

「恥ずかしがってすみません！」

こんな可愛い制服を私が

着てもいいのかなと思ひまして……本当はアント・チ

ラーズの制服、とっても可愛くて気に入っています！」

「そっか、気に入ってくれたなら良かった」

「照れちゃった罰として、後ろで手を組みまーす」

《満場の拍手。空気を壊すことは許されない郁》

「申し訳ありませんでした……」 《手を後ろに回す》

「おっぱいでかつ」「アンチラ最高!」「スリーサイズ教えて!」「聞きたい!」「教えて!」

「…スリーサイズは、84・60・86、です」
(さつき翠さんに言われちゃったし)

「オッパイおつきい!」「アンチラの店員になれば?」
「郁ちゃんいたら毎日通うよ(笑)」

「もう手を戻してもいいですか?」「だめー」

「今までの彼氏は何人?」「バージン?w」

「そ、そんなこと!」 (いい加減にしてっ)

「郁ちゃんは処女ですよー、たぶんw」「翠さんっ」

「おおおっ」「そのオッパイ揉ませたことないの?w」

《郁の胸突き出しポーズが好評のため、今度は頭の後ろで手を組んで、ルール確認をすることになる》

「柏木さんが、①注文を間違えるか、②商品をこぼすなど粗相をするか、③提供に3分以上かかった場合、ミスとします。いいですね」

「はい」 (聞いたらすぐ出せばいいのね)

「ミスをしたら、このサイコロの指示に従います」

「はい」 (とにかくミスをしなければ)

「終了条件は二つのいずれか。①柏木さんが5回連続正しく注文を処理するか、②三浦社長が到着されること」

「はい」 (5回間違えなければ終わりなのね！)

「あと、大量注文など嫌がらせは禁止……以上ですが、何か質問はありますか？」

「はい、大丈夫です」 (5回ちゃんと注文に応えたら終わりね……それなら大丈夫！)



《ゲームスタート。最初の注文はハニー社の両部長》

「はい、生ビールと黒生です。お待たせいたしました」
(やるしかないんだから！ 笑顔、笑顔！)

「似合ってるよー」 「おっぱいw！」 「次はこっちな」

「早く来ないと3分経っちゃうぞ！」

「元気に声も出さないとな」

「はい、お待たせしました！」

(あと4回の我慢よ……)

《間近で見るアンチラの制服姿ににやける権藤たち》

「うん、いつもその笑顔でいるんだぞ」

「ゲームとは言え、うちのウェイトレスなんだからな」

「はい、分かりました……黒生はどちらの方でしょう？」

「ああ、俺だよ……ここに置いて」

《わざと郁から少し離れた場所を指定する権藤》



《わざと離れたところを指定され少し戸惑う郁》

「はい、そちら、ですね……」

「おいおい、不満な態度を見せたら駄目だぞ。接客業なんだから、エッチな客にもきちんと対応しないと」

「がんばれー」 「お客様に失礼したらミスだよー」

「はい、申し訳ありません、こちらですね」

（ミスにされたら困るし……）

「乱暴に置いて泡をこぼしたらミスだぞ」

「はい……」

《ゆっくり身体を曲げる郁。後方に向け、徐々にスカートの裾が上がる様子を見せてしまう》

「おおお」 「いい太ももだな」 「もう少しで見えそう」

「あの子、新人でしょ」「よくやるわね」

《女子社員のヒソヒソ声も聞こえ、羞恥に熱くなる郁》

「こちら、黒生ビールでございます……」

（ああ、ショーツが見えちゃいそう……）

《さらに腰を折り曲げ、なんとかテーブルに置く》

「お待たせしました」 (後ろが気になる…)

「うん、ぎりぎり合格だな。次はもっと笑顔でな」

「はい、ありがとうございます」

(私、店員じゃないのに…)

「このビールの特徴は？」

《藤堂がわざと時間を稼ぐ》

「それはちよつと、まだ……」

「きみ、ハニー社のためならなんでもするんだろ？
ウェイトレスをするなら商品知識がないとねえ」

「藤堂さんはからかってるのよ。軽く流すのよー」

「そうそう」 「絡まれてあしらうのも仕事だよー」

「すみません、今度勉強しまあす！」

「それからね、ぎりぎり合格にしたけど……」

「はい、何か行き届かなかったでしょうか？」

「ジョッキを置くとき、音がしたんだよね？」

「音、ですか？」

「そう。トン、とね。本当はもっとゆっくり丁寧に、そつと置かなきゃいけないんだぞ」

「はい、申し訳ありませんでした」

「もう少し腰を屈めて丁寧に、もう一回置いてみて」

「はい……」

(あはは、見えた！) (白？ピンク？) (太もも！)

(藤堂さん意地悪w) (お子ちゃまショーツw)

「うん、まあそんなもんかな」

「こっちの方も早くねー」

「はい、お待たせしました！」 (やっと1回目完了ね)

《ジョッキを置く度に後方にパンチラを披露する郁。意地悪なギャラリィはわざと指摘しない》

《2回目。郁は次の注文を持ち、会場に現れて絶句》

「きゃ、何ですか、これ！」

「2回目は鏡張りだよ」「クリアする度にハードル上がるのがルールだよ」「スイッチ一つで鏡張りになる仕掛け!」「ほら、笑顔でお届けしなきゃ」

「そ、そんな……」

「余計なこと気にしないで頑張って!」

「はい……」(翠さんまで、ひどい)

「やるの? やらないの?」

「や、やります……」(会社のためなんだから)

「同じ注文にしてあげたんだから、頑張って」

「白いパンツならさつき見たから気にしないで(笑)」

「急いで。笑顔じゃないと失格だぞ」

《できるだけ足を開かず、そっと歩く郁。通り過ぎる
テーブルの客達が鏡を覗き込む》

「あの、そんなに見ないでください……」

「パンチラもサービスのうち」「おお、よく見える！」「
「やっぱり白だ」「リボン付き、可愛い！（笑）」

「そんなにじろじろ見ちゃ可哀想！（笑）」

「お待たせしました……」（こんなのひどい……）



《郁の背後からも覗いてからかう男達》

「お尻振りながら歩くのエッチだね」「アンチラ店員の鑑！」「パンティはもう少しお洒落なのがいいなw」

「……」(とにかく早く注文を終わらせよう。私のせいで提携が危なくなってるんだから、社長が来るまで絶対に場をつなぐのよ)



《鏡越しにパンティを見られ、からかわれながらも我慢して給仕を続ける郁》

「あれ、ちよつと見えてない？」 「嘘？ 本当だ！」

「え、何々？……」 「本当かよ」 「どれどれ……」

（なんかへんなひそひそ声……なんだろう？）

「郁ちゃん、パンティからアソコの毛がはみ出てるよw」

「きゃ、いやっ」



「冗談よ、ばかねえ」 「からかわれたくらいで動揺しちゃ駄目よ」 「あーあ、こぼしちゃったw」

「女子の方が厳しいなw」 「次の衣装は何かな」

「そんな……」 （騙すなんてひどい……）



PART 6

《ミスをしたため次の衣装に。電子サイコロの表示は「パーミヤン」。制服を着てきた麻衣子は両手を脇に下ろしもじもじしている》

「あの、そんなに見ないでください……」

「どうしたの、堂々としなきや」

「チャイナドレス、似合うね」「かわいい」

「にっこり笑って」「お客様の「要望ですよ」

「ちよっとスリットが深すぎで……」（誰か助けて）

「あれ、ウチの制服に文句つけるの？」

「いえ、そういうわけでは……ただ、これでは……」

「これでは？」

「その、下着が、見えてしまいます……」

「ウチのためになんでもするんだろ？」（この顔がたまらんw）

「はい、郁ちゃん、頑張って」《視線で促す翠》

「わ、分かりました……」

《お客様来店時の挨拶をするよう命令された郁。指示どおり、身体の前で両手を組む。白いパンティは前と後ろを隠されただけ》

「い、いらっしやいませ。パーミヤンへようこそ……」
(みんなにショーツを見られてる……)

「なんかいまいちねー」「表情硬いし」

「白パンティ」「子供っぽくて可愛い！」(笑)「

「だめ、やり直し！ もっと笑顔で」

「はい……いらっしやいませ！」(権藤部長、ひどい……)



《3回やり直しさせられ、ようやく許された郁》

「ま、そんなもんかな。……今度からは、恥ずかしがったりしたら一枚脱ぐペナルティを追加するからな」

《突然の提案に盛り上がる店内》

「そ、そんな……」

「はい、分かりました！ 柏木郁、とびっきりの笑顔で頑張りまーす！」(ふふ、まだまだ頑張ってね)

《最初の注文は2杯だけ。持つのは慣れたが、下半身に
集まる視線に恥じらう郁》

「ご注文の品をお持ちしました……」

「うん、ありがとう」「俺が黒ね」

「ちよっと恥ずかしそうだな」

「そ、そんなことありません!」

《恥ずかしがったら脱がされてしまうと思
い、必死に笑みを浮かべる》

「ゆっくり、音を立てないように置くんだよ」

「はい……」(みんな、エッチな目で見てる……)

「それ終わったら、次はこっちなね」

「はい、分かりました!」(社長、早く来てください)

《遠くのテーブルから注文された郁。恥ずかしい姿を各テーブルに披露しながら歩くことに》

「すみません、通りますね……」 (恥ずかしい)

「うわ、横からだだとパンティ丸出しw」

「足も全部見えてるね」

「パーミヤンのドレスって、こんなだっけ」

「いや、もっとおとなしいんだろw」

(え、そんな……)

「あれ、笑顔は？」

《騙されたとうすうす気づきながら作り笑いの郁》

「はい、失礼しまーす！」 (とにかく失敗しなければ……)

《ようやく注文されたテーブルに到着した郁》

「黒はこっちなね。分かってると思うけど……」

「ゆっくり、音を立てないようにですよね？」

《腰を屈めてビールを置くときに、じっくりと胸元を見つめられる》

「郁ちゃん、ブラはしてないの？」 《ニヤニヤして胸元を覗き込む》

「……」

「酔ったお客様対応の練習よ。頑張って」

「……はい、していません」

「へえ、ノーブラなんだ（笑）」

「ウチの制服、どう思う？」

「……とても綺麗で、大好きです」（好きな訳ないでしょ！ やつと1回クリアね……）



《1回目をクリアした郁。次の注文も2杯だけで安堵するが……》

「きゃ、あ、あん！」

「乳首にヒット！」「お、いい声で啼くねえw」

「ちょっと、やめてください！」

「これが2回目のハードルだよ」

「いたずら棒って奴」

「酔ったお客様が触ってくる場合があるから、その練習だよ」

「そんな……あん！」

「こんなことで失敗するなよ」

「気にしちゃだめよw」

「急がないと時間切れ」

「スルーしないと調子に乗るよ」

「こんなにあんまりです！ あ、あん！」

《身をよじらせるが、乳首を責められて悶える郁》

「柏木郁、乳首が感じちゃいますー」

《場内爆笑》

《なんとか乳首責めを逃れ、注文のテーブルに来た郁》

「はい、黒ビールです。お待ちせしました!」(なんとか間に合った) 《笑顔でゆっくりと腰を曲げていく》

《背後からそーっといたずら棒が近づく。ニヤニヤしながら見つめるギャラリィ》

「そーっとね」

「はい」

(なんか静かね)

「よいしょ!」

「きゃ、きゃあ!」

「おおおっ」

《歓声と拍手に包まれる場内》

「お尻もおっきいんだねw」「太ももムチムチ」「もう少しセクシーなパンティがいいなw」

「やめてください! 下してください!」(ビールをきちんと置くまでは隠せない……ひどい)

《2回連続で注文をこなした郁》

「郁ちゃん、こっちも生と黒よろしく！」

「はい！」（あと3回成功で終わり…頑張らなくちゃ）

《素早く両手にビールを持ってくる》

「少々お待ちくださいーい！」

（恥ずかしいけど、笑顔笑顔！）

《両脇のテーブルからそつと棒が伸びてくる》

（気づかれないようにそーっと）

（チャンスは1回だぞ）

（郁ちゃんに気付かれるなよ……）

（きゃあ、可哀想！w）

《郁が真横に来た瞬間、両側の二人が棒の先を郁のパンティに引っ掛け、一気に引き下ろす》

「おお、完璧！」 「奇跡！」 「エロパワー凄いなw」

「きゃ、きゃああっ」 (嘘でしょ、脱がされた！)

「落ち着いて！ ビールをお渡ししてから直せばいいじゃない」

「そ、そんな……」

(これじゃあ、見えちゃう……)

「自分からやめたら提携解消だぞ」

「このくらいのイタズラに負けたらダメだよ」

「大丈夫です、柏木はこんなことで負けません」

「翠さん……」 (この姿で人前を歩けと言うの?)

「偉いぞー」 「頑張れー」 「さすがK社だな」

「へー、すごいねー」 「私には無理w」

《ずり落ちたパンティを直せないまま歩く郁》

「……」(これは現実?)

「うわ、いい眺め!w」「脱ぎ掛け最高!」

「もうやだ!」「みんなエッチな目!w」

「ちよっと表情硬いなあ」

「郁ちゃん、笑顔笑顔!」

「はい……」

《注文は一番奥の席。裾が捲れないように慎重に歩く郁》

「じっくり見せてくれる!」「サービスいいねえw」

(恥ずかしい……目の前がぼうつとしてきた)

●REC

《ぼうつと歩いている郁にカメラが……》

「よし、ばっちり撮れた」「可愛いお尻！」

「え？ きゃあ！ 撮らないでください！」

「余興を撮るのは当たり前だろ？」

「はい、でも公開はしないでくださいね。」

「三浦の遅刻の件も」容赦ください」

「もちろん。提携も大丈夫。こんなに誠意を見せてもらったらねえw」

（これが誠意って……）

1080p 45min 1/60 F3.5

00:40:28

©ILLUSION

《いやらしい視線の中、なみなみ継がれた
ビールをこぼさないようゆっくり歩く郁》

（ひどい、これじゃあ見世物じゃない……
でも、提携は絶対にしなくちゃいけない
……社長、早く来てください）

1600×900 HQ



●REC

《郁の下半身に次々カメラが向けられる》

「前から撮るぞ」「隙間から見えそうw」

（やだ、早く通り過ぎないと）

「撮れた!」「毛が薄いんだねw」

「きゃあ! ダメですっ!」

「あなたがのんびり歩くのが悪いのよ」

「そんな…」（あんまりです、翠さん）

「俺なんて裸踊りしたこともあるぞ」

「それは時代が違いますw」「郁ちゃん

偉いね!」「がんばれ!」

（お願い、早く終わって…）

1080p 45min 1/60 F3.5

00:40:28

©ILLUSION

1600×900 HQ

《ようやく奥のテーブルに着いた郁》

「お待たせしました。黒の方はどちら様でしょう?」
(早くビールを置いてシヨーツを直すのよ)

「あ、俺でーす」 「俺は生ね」

「はい」 《音を立てると失敗にされるので、
ゆっくり体を傾ける郁》

《背後から二つの棒が近づく》

(よし、全然警戒してない) (罠に引っかかってばっ
かりで可愛いなw) (うそ、まさか) (やだーw)

《棒を持つ一人がドレスの後ろの裾を持ち上げ、もう一人がパンティをさらに下ろす》

「おお、お尻丸出し!」 「プリプリ!」 「撮ってるか?」 「すっごーい」 「かわいそー」

「きゃああっ! やめて下さい、見ないでっ!」

「そう言われてもw」 「目の前にケツ突き出されたら見るよなあ」 「録画もしてるよー」

「撮らないで! いやああっ!」 《ビールを傾け、机の上にこぼしてしまっ》

「おい、何してるんだっ」 「うちの大事な商品を!」

《3回目は失敗となり、お尻を見られて涙目の郁》

「私、もう無理です。録画は消してください」

「甘えちゃ駄目よ、郁ちゃん！」

「まあまあ、翠ちゃん……ちよつと悪乗りしすぎたね」

「権藤さん……」

「録画はこの会の中の余興だから、このゲームが終わったら全部削除させるよ」

「はい……」

「社長から電話よ。今から会社を出るそうよ」

「次はイタズラなしにするから、もう少し頑張ろうか」

「はい、頑張ります」 (5回成功しなくても、社長が

来たら終わるんだし……あと、少しだけよ)

「では、次の衣装を決めるサイコロを振ってください」

使用したプログラム・素材等

- 本作品は、ILLUSIONの「ハニーセレクト ～コンプリートパック～」を使用して作成しています。 (http://www.illusion.jp/preview/honey_party/index.php)
- また、イリュージョン公式ページに投稿のキャラデータやシーンデータを活用しています。その他、個人HPに掲載の服なども使用しています。各作者の方に感謝いたします。
- 本作品のコンテンツの著作権は ILLUSIONに帰属し、販売等は認められていません。転載・販売等を行わないようお願いします。